古英語における him, heom, þam の分布
—they 型の漸進的発達との関わり—[1]

小塚 良孝

本稿では、現代英語三人称複数代名詞 they とその変化形（以下 they 型）の発達について、古英語期の人称代名詞と指示代名詞の調査を基に考えられることを述べる。本稿の構成は以下のとおりである。1 節で they 型の発達に関する研究の現状を示す。その後、2 節で本研究の概要を示し、3 節で調査結果の提示とそれに基づく議論を行い、4 節でまとめを述べる。

1. they 型の発達に関する様々な見解

一般的には they 型は古ノルド語人称代名詞の借入だと考えられている。閉鎖類語彙の借入は異例だが、9 世紀以降のデーンロー地域におけるアングロ・サクソン人とデーン人の親密で長期に渡る共存とその間の言語接触（e.g., Baugh and Cable, 2002）、そして、古英語人称代名詞のパラダイムが孕む同音異義衝突を回避したいという治療的動機（therapeutic motivation）（e.g., Werner, 1991; Durkin, 2014）が背景にあると考えられている。

一方、借入という全く外的な要因のみではなく、古英語の指示代名詞の複数形（þa, þara, þam）が they 型の発達に関わった可能性も指摘されている（e.g., Sweet, 1892; Ogura, 2001; 横田, 2012）。つまり、同音異義衝突回避のために意図的に、または、指示代名詞と三人称代名詞の両者の機能が似ているために無意識的に両者を混用し、北部ではこの混用が古ノルド語の影響で特に進み、形態的にも影響を受け、they 型の発達につながった、という考えである。古英語の指示代名詞の関与を支持する証拠として、後期ウェスト・サクソン方言には、þa の強調形として þæge という they を想起させる語形が数例報告されている（Förster, 1941, 1942; Ogura, 2001）。

その後の発達に目を向けると、古英語末期または初期中英語期に北部方言で始まった they 型は徐々に南下し、16 世紀初めまでに従来の h-型に取って代わる。そのプロセスに関する興味深い点として、they 型の浸透はかなりの時間を要しただけでなく、まずは主格形、次に属格形、最後に斜格形というように三段階（three phases）を経たことが指摘されている。表 1、2 は Lass（1992, 2006）による they 型発達の三段階の要約である。

表 1．中英語全般における三人称代名詞複数形の変化の三段階（Lass, 1992, 121）

	I	II	III
Nominative	þei	þei	þei
Genitive	her(e)	her(e)～þeir	þeir
Oblique	hem	hem	hem～þem

表 2．東中部方言における三人称代名詞複数形の変化の三段階（Lass, 2006, 75）

	c.1380	c.1440	c.1480
Nominative	þei	þei	they
Genitive	her(e)	her(e)～ther	their
Oblique	hem	hem	hem～them

なぜ主格からかということについては様々な見解があるが、一般的には、主格形とそれを受ける動詞の屈折の双方で単純化が進んだことにより単複の区別が難しくなったからだと考えられている（Werner, 1991; Howe, 1996; Durkin, 2014）。また、主格の新しい形態が他の格に影響を及ぼして類推で広がったのか、いずれも借入されたが浸透度に差があっただけなのかということについてもたびたび議論される（Werner, 1991; Howe, 1996）。

このように、英語史において大きな変化の一つである they 型の発達過程に関しては様々な可能性や不明な点が指摘されているものの、意外にも実証的な研究は十分に積み重ねられておらず、やや古いが Ritt（2003）の以下の言葉にあるように、その実態はまだよくわかっていない。

> While missing from no major handbook, however, the story how Scandinavian pronouns found their way into English has not been subject to as many detailed and systematic treatments as one would expect. (Ritt, 2003, 280)

とりわけ、発達の最初期である古英語期の状況については特にデータ不足で、その実態は特に不明である。それゆえ、they 型の発達過程の解明にはまずは基礎データの蓄積が必要であり、特に、後期古英語期の人称代名詞と指示代名詞の使用の状況を明らかにすることが不可欠であると考える。また、そうしたデータに基づいて上述のような様々な可能性は検証される必要がある。

以上のような状況を踏まえ、本稿筆者はいくつかの古英語のテキストにおける人称代名詞と指示代名詞の使用状況を分析し、they 型の発達について再考しているところである。以下、本稿では、古ノルド語の影響があったと思われる北部方言と、その影響がない（または弱い）中部・南部方言のそれぞれに、その後の they 型の発達の流れにつながる状況が認められること、また、その同時進行と衝突という点から they 型の発達の漸進性が説明されうることを、福音書と詩編の調査結果を基に論じる。

2. 調査文献と調査方法

本稿では、表 3 の 6 つの聖書翻訳（または行間注）の調査結果を示す。翻訳文献を調査対象としたのは、できるだけ近い用法同士で比較するためである。注目したのは、ラテン語の is, ille, ipse の訳語である。ラテン語には三人称代名詞はなく、主に本来指示代名詞である当該三語がその役割を担う。ただし、この三語は is<ille<ipse の順に指示性が高くなる（Nunn, 1927）。

表 3. 調査対象文献の概要*

方言	年代**	タイトル	略称
Northumbrian	*c*.950	the gloss to the Lindisfarne Gospels	Li
Mercian	9c	the gloss to the Vespasian Psalter	PsGlA
	c.950	Farman's gloss to the Rushworth Gospels	Ru[1]

West Saxon	*c*.950	the gloss to the Royal (Regius) Psalter	PsGlD
	c.1000	the West Saxon Gospels (CCCC 140)	WSCp
	12c	the West Saxon Gospels (Oxford, Bodleian, Hatton 38)	WSH

*使用校訂本、ウェブサイト、電子資料については参考文献を参照

**Morrell（1965）, Kitson（2002）に基づく

上記文献における is, ille, ipse の訳語に関し、（１）古英語において指示代名詞と人称代名詞の機能重複・使い分けはどの程度見られるか、（２）人称代名詞複数与格の二形態（him, heom）と指示代名詞複数与格 þam の分布状況、の二点を調査した。

3. 調査結果

3.1 指示代名詞と人称代名詞の交替可能性

まず、指示代名詞と人称代名詞の交替可能性についての調査結果を示す。表 4 は Li の is, ille, ipse のすべての箇所の注解を示している。この表が示すように、単数と複数では明らかに傾向が異なり、対象とするラテン語に関わらず複数では指示代名詞の選択率が上昇する。

表 4. Li における is, ille, ipse の注解*

	is		*ille*		*ipse*	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	1467(93.3)	438(82.0)	501(78.9)	280(59.4)	120(76.4)	20(29.0)
se	79(5.0)	77(14.4)	108(17.0)	159(33.8)	28(17.8)	31(44.9)
se ilca	25(1.6)	19(3.6)	25(3.9)	30(6.4)	8(5.1)	15(21.7)
others	1(0.1)		1(0.2)	2(0.4)	1(0.6)	3 (4.3)
Total	1572(100)	534(100)	635(100)	471(100)	157(100)	69(100)

*he＝人称代名詞、se＝指示代名詞、se ilca＝指示代名詞＋ilc（以下同様）

以下の表 5～7 は、3 つの方言の福音書の is, ille, ipse の訳語を比較した結果をまとめたものである。なお、表 5～7 における福音書の調査範囲は、Ru[1] の範囲（Mt, Mk 1-2:15, Jn 18:1-3）のみである。

表 5. Li, Ru[1], WSCp, WSH における is の注解または訳語

	Northumbrian		Mercian		West Saxon			
	Li		Ru[1]		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	448(92.2)	140(82.4)	456(93.6)	142(86.6)	411(95.1)	118(90.8)	407(94.2)	116(89.9)
se	23 (4.7)	20 (11.8)	27 (5.5)	22 (13.4)	9 (2.1)	11 (8.5)	9 (2.1)	11 (8.5)
se ilca	15 (3.1)	10 (5.9)	1 (0.2)					
others			3 (0.6)		12 (2.8)	1 (0.8)	16 (3.7)	2 (1.6)
Total	486(100)	170(100)	487(100)	164(100)	432(100)	130(100)	432(100)	129(100)

表 6. Li, Ru[1], WSCp, WSH における ille の注解または訳語

	Northumbrian		Mercian		West Saxon			
	Li		Ru[1]		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	83 (75.5)	81(59.1)	78 (88.6)	104 (90.4)	68 (90.7)	93 (93.0)	69(90.8)	92 (94.8)
se	24 (21.8)	46(33.6)	9 (10.2)	11 (9.6)	7 (9.3)	4 (4.0)	7 (9.2)	2 (2.1)
se ilca	3 (2.7)	10 (7.3)						
others			1 (1.1)			3 (3.0)		3 (3.1)
Total	110(100)	137(100)	88(100)	115(100)	75(100)	100(100)	76(100)	97(100)

表 7. Li, Ru[1], WSCp, WSH における ipse の注解または訳語

	Northumbrian		Mercian		West Saxon			
	Li		Ru[1]		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
he	18(54.5)	5 (31.3)	17(68.0)	12(92.3)	22(84.6)	10(83.3)	21(80.8)	10(83.3)
se	12(36.4)	6 (37.5)	4 (16.0)		2 (7.7)	1 (8.3)	2 (7.7)	1 (8.3)
se ilca	2 (6.1)	4 (25.0)		1 (7.7)				
others	1 (3.0)	1 (6.3)	4 (16.0)		2 (7.7)	1 (8.3)	3 (11.5)	1 (8.3)
Total	33(100)	16(100)	25(100)	13(100)	26(100)	12(100)	26(100)	12(100)

この比較から、デーン人との接触があった地域のノーサンブリア方言のテキスト（Li）においては、他の方言のテキスト（Ru[1], WSCp, WSH）に比べ、指示代名詞の使用頻度が高く、とりわけ複数形になると指示代名詞を用いる比率が非常に高いことが窺える。なお、Li には、古ノルド語からの借入語が多く、また、その内容も、専門用語だけでなく、一般語も多く含まれていることが指摘されており、注解者は古ノルド語に通じていたと考えられる（Pons-Sanz, 2013）。その点からすると、人称代名詞と指示代名詞の使用においても一定程度転移があったことは十分に考えられる。

以上のように、調査した範囲ではノーサンブリア方言の Li において、中英語以降の発達につながる状況が認められるが、一方で、指示代名詞と人称代名詞の相互乗り入れのような状況はマーシア方言、ウェスト・サクソン方言の文献にはさほど認められない。しかし、人称代名詞の使用をより詳細に分析すると、マーシア方言、ウェスト・サクソン方言にも they 型の発達プロセスに関わる特徴が見出される。次節では、その点について論じたい。その際に注目するのは後期古英語期から三人称代名詞与格複数形として him に加えて使われ始める heom という形態である。

3.2　複数与格形 him と heom の使用

3.2.1　heom に関する見解

古英語の人称代名詞の三人称複数与格の一般的な形は him であるが、後期古英語からそれに加え heom という形態が、主にウェスト・サクソン方言の文献に現れる。これは古英語期における代名詞の形態の大きな、また、明確な変化の一つであるが、管見では詳細な研究はこれまでなされていないようで、古英語の概説書類でもこの形態について触れられないことも少なくない。

先に述べたように、heom については詳しい研究はないが、いくつかの文献において、出現理由などについての考察がある。まず、この新しい語形が後期古英語期に生み出された理由については、Sweet（1892）や Hogg and Fulk（2011）は、与格の単数形、複数形の区別のためではないか、と述べる。また、なぜ heom という形態になったのかについては、Sweet（1892）と Hogg and Fulk（2011）が複数属格の一形態 heora からの類推、Howe（1996）　が複数主

格の一形態 heo からの類推の可能性を指摘する。

それほど注目されていない heom という形態の使用であるが、次節で論じるように、they 型の発達プロセスに大きな影響を及ぼしている可能性がある。

3.2.2　ノーサンブリア方言とマーシア、ウェスト・サクソン方言の違い

前節で扱った古英語訳福音書に加え、一部詩編（詳細は表 3 を参照）も調査対象として、is, ille, ipse の訳語における三人称代名詞複数与格形 him, heom、指示代名詞複数与格 þam の分布を調査した。ただし、福音書の調査範囲は Ru[1] の範囲（Mt, Mk 1-2:15, Jn 18:1-3）のみで、詩編については、ille と ipse のみを調査した。以下の表 8～10 が調査結果である。

表 8. 福音書における is の注釈・訳語としての him, heom, þam の使用

	Northumbrian		Mercian		West Saxon			
	Li		Ru[1]		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
þam	4	5	11	7	1	1	1	1
heom	0	0	4	49	1	3	2	43
him	147	60	167	9	141	43	135	2

表 9. 福音書、詩編における ille の注釈・訳語としての him, heom, þam の使用

	Northumbria		Mercian				West Saxon					
	Li		PsGlA		Ru[1]		PsGlD		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
þam	5	30	0	0	3	6	0	0	0	2	0	2
heom	0	0	0	0	3	65	0	0	0	13	1	41
him	52	58	13	33	40	3	14	31	31	32	30	4

表 10. 福音書、詩編における ipse の注釈・訳語としての him, heom, þam の使用

	Northumbrian		Mercian				West Saxon					
	Li		PsGlA		Ru[1]		PsGlD		WSCp		WSH	
	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl	sg	pl
þam	2	1	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0
heom	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
him	1	1	14	7	4	0	16	5	2	1	2	0

表 8〜10 の数値から、Li では、単数、複数とも him のみを用いるが、マーシア方言とウェスト・サクソン方言の文献では heom が用いられ、特に Ru[1]、WSH では複数での heom の使用はほぼ規則的であることが指摘される。

前節の調査結果と heom の分布を念頭に置くと、三人称代名詞の同音異義衝突の解消のため、ノーサンブリア方言とその他の方言では別々の解決策が取られた可能性が考えられる。つまり、ノーサンブリア方言では、指示代名詞の人称代名詞的使用（と古ノルド語由来の語形の使用）が進み、結果的にそれが同音異義衝突回避、they 型の発達につながり、一方で、他の方言では、そうした変化は進まず、代わりに、与格複数形で heom を確立させたように、従来の h-型において人称代名詞の形態上の差別化が進んだのではないか、ということである。なお、*An Electronic Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*（eLALME）で確認すると、後期中英語期に hem が中・南部で浸透・拡大している様子が窺える。

以上のことから、they 型の発達が北部で始まり、南下するという流れの一方で、中・南部では、従来の h-型の中での変革が進み、それが拡大するという流れも認められ、この相反する流れの衝突・拮抗が they 型の浸透の遅さ、段階的進展につながったかもしれない。

4. 結語

以上、本稿では they 型の発達プロセスを明らかにするため、古英語期の指示代名詞、人称代名詞の使用実態をいくつかの文献について調査・分析した結果を示した。また、その結果に基づいて、ノーサンブリア方言とマーシア

方言とウェスト・サクソン方言では三人称代名詞と指示代名詞の使用に関し異なる傾向が見られること、また、その両者の同時進行と衝突が、冒頭で紹介したような they 型の漸進的発達につながった可能性を示した。

以上の見解は非常に限られた調査に基づくものなので、今後は古英語の状況をさらに調査するとともに、中英語期の h-型の変化の状況もより広範囲かつ詳細に調査する必要がある。[2]

注

1. 平成 30 年 4 月 21 日に開催された名古屋大学英文学会のシンポジウム「英語史における名詞・代名詞の実証的・理論的考察」にて発表した内容に加筆修正を加えたものである。本稿は科研費（JSPS JP18K00643）の助成を受けて実施された研究の成果の一部である。
2. 本稿以外の研究成果については、Kozuka（2018, forthcoming）を参照されたい。

参考文献

■Electronic resources and websites

Bodleian Library, LUNA. [http://bodley30.bodley.ox.ac.uk:8180/luna/servlet/detail/ODLodl~24 ~24~127350~142891]

British Library, Digitised Manuscripts. [http://www.bl.uk/manuscripts/FullDis play.aspx?ref=cotton _ms_nero_d_iv]

Dictionary of Old English. *The Dictionary of Old English (DOE) Corpus in Electronic Form, TEI-P3 Conformant version* (for 3.5inch floppies), 1998 Release. Toronto: Dictionary of Old English Project, University of Toronto.

Benskin, M., M. Laing, V. Karaiskos and K. Williamson. (ed. 2013) *An Electronic Version of A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English* [http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/elalme/elalme.html]

■Editions

Kuhn, Sherman M. (ed. 1965) *The Vespasian Psalter.* Ann Arbor: University of Michigan Press.

New Revised Standard Version (1989) *The Holy Bible Containing the Old and New Testaments: New Revised Standard Version*. Oxford: Oxford University Press.

Roeder, Fritz (ed. 1904) *Der Altenglische Regius-Psalter*. Tübingen: Max Niemeyer. [rpt. 1973]

Skeat, Walter W. (ed. 1871-87) *The Holy Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions.* Cambridge: Cambridge University Press. [rpt. 1970]

Tamoto, Kenichi (ed. 2013) *The Macregol Gospels or The Rushworth Gospels: Edition of the Latin Text with the Old English Interlinear Gloss Transcribed from Oxford Bodleian Library, MS Auctarium D.2.19.* Amsterdam: John Benjamins.

■Studies

Baugh, Albert C and Thomas Cable (2002) *A History of the English Language* (5th ed.). London: Routledge.

Campbell, A. (1959) *Old English Grammar*. Oxford: Clarendon Press.

Durkin, Philip (2014) *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: Oxford University Press.

Förster, Max (1941) "Die spätae. deiktische Pronominalform *Þæȝe* und ne*. They.*" *Anglia Beiblatt* 52, 274-80.

Förster, Max (1942) "Nochmals Ae. *Þæȝe.*" *Anglia Beiblatt* 53, 86-7.

Gordon, E.V. and A.R. Taylor (1957) *An Introduction to Old Norse* (2nd ed.). Oxford: Clarendon Press.

Hogg, Richard M. and R. D. Fulk (2011) *A Grammar of Old English. Vol. 2: Morphology*. New Jersey: Wiley-Blackwell.

Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages: A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First Records to the Present Day.* Berlin: Walter de Gruyter.

Kitson, Peter (2002) "Topography, Dialect, and the Relation of Old English Psalter-Glosses

(I)," *English Studies* 83, 474-503.

Kozuka, Yoshitaka (2018) "Reconsideration of the Development of English Third-person Plural Pronouns: An Analysis of the Use of Personal and Demonstrative Pronouns in OE Biblical Glosses", in: Michiko Ogura and Hans Sauer, eds., *Aspects of Medieval English Language and Literature,* Peter Lang, Frankfurt, *197-214*.

Kozuka, Yoshitaka (forthcoming) "Interchangeability of Demonstrative and Third-person Pronouns in Old English: A Gateway to Modern English *They*?" *Studies in Modern English* 38.

Lass, Roger (1992) "Phonology and Morphology", in: *The Cambridge History of the English Language*, vol. II (1066-1476), Norman Blake (ed.), 23-155. Cambridge: Cambridge University Press.

Lass, Roger (2006) "Phonology and Morphology", in: *A History of the English Language,* Richard M. Hogg and David Denison (eds.), 43-108. Cambridge: Cambridge University Press.

Morrell, Minnie Cate (1965) *A Manual of Old English Biblical Materials*, The University of Tennessee Press, Knoxville.

Nunn, Henry P. V. (1927) *An Introduction to Ecclesiastical Latin.* Cambridge: Cambridge University Press.

Ogura, Michiko (2001) "Late West Saxon Forms of the Demonstrative Pronouns as Native Prototypes of *They*." *Notes & Queries* 48, 5-6.

Pons-Sanz, Sara M. (2004) "A Sociolinguistic Approach to the Norse-derived Words in the Glosses to the Lindisfarne and Rushworth Gospels", in: Christian Kay, Carole Hough & Irené Wotherspoon (eds.), *New perspectives on English Historical Linguistics: Selected Papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21–26 August 2002, volume II: Lexis and Transmission*, 177-92. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Pons-Sanz, Sara M. (2013) *The Lexical Effects of Anglo-Scandinavian Linguistic Contact on Old English.* (Studies in the early Middle Ages, v. 1) Turnhout: Brepols.

Ritt, Nikolaus (2003) "The Spread of Scandinavian Third Person Plural Pronouns in English: Optimisation, Adaptation and Evolutionary Stability", in: Dieter Kastovsky & Arthur Mettinger (eds.), *Language Contact in the History of English*, 2nd, revised

edition, 279-304. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Sweet, Henry (1892) *A New English Grammar: Logical and Historical.* Part. I. Oxford: Oxford University Press. (東京：名著普及会, 1983).

Werner, Otmar (1991) “The Incorporation of Old Norse Pronouns into Middle English: Suppletion by Loan”, in: P. Sture Ureland & George Broderick (eds.), *Language Contact in the British Isles: Proceedings of the Eighth International Symposium on Language Contact in Europe, Douglas, Isle of Man, 1988,* 369-401. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

横田由美 (2012)『ヴァイキングのイングランド定住 ： その歴史と英語への影響』神奈川：現代図書.